

日本災害情報学会

写真で見る第7回学会大会概要

2005. 10. 28-29

日本災害情報学会の第7回学会大会が、10月28日（金）から2日間にわたって、京都大学・宇治キャンパス木質ホール（京都府宇治市）で開催された。

7回目を迎えた今回は、学会会員数も、発足時の300人台から570人を超えるまでに増加したことから大会参加者も増え、2日間で延べ約180人に達した。研究発表数も大きく増えて、延べ50人の発表が行われた。

快晴に恵まれた大会初日は、阿部勝征会長の開会挨拶で始まった。阿部会長は挨拶の中で、今回の実行委員会の中核となって尽力をした京都大学防災研究所スタッフへの感謝の言葉を述べ、第7回大会の成功を誓った。続いて研究発表に移り、初日のこの日は延べ35人が次々に壇上に上がり発表した。

研究発表は9時半過ぎに始まり、まず、座長をアジア航測の天野篤氏が務める中、土砂災害対策や風水害対策をテーマに11人が研究発表を行った。

今回の研究発表は、当初の予想を大きく上回る応募があったことから、一人当たりの持ち時間が8分間という厳しい時間制限となった。そして、開始後6分が経過した所で予鈴1回、持ち時間いっぱいになる8分で2回鳴らされ、1分オーバーの9分になると鈴が連打されて発表が打ち切りになるというものだったが、殆どの発表者が、2回の合図音、つまり8分の持ち時間いっぱい終了するという時間厳守ぶりだった。同様に、時間の節約措置として、最大で7人の発表が終了した所で、まとめて質疑応答を行うという新しい試みも採用されたが、大きな混乱もなく予定時間をほぼオンタイムで消化して行くことが出来た。

午後になると、座長が岩手県立大学の牛山素行氏に代わり、地震防災や災害情報をテーマに発表が続き、さらに休憩をはさんで大妻女子大の干川剛史氏が座長になって災害情報や情報システムについての研究発表が、そしてアジア航測の天野氏が再度、座長を務めて情報システムの発表や昨年発足した「デジタル放送研究会」の中間報告が行われた。

結局、初日の研究発表は合計で延べ35人に達し、終了が午後6時過ぎというロングランとなったが、総じて、質問者が特定の顔ぶれになったこと、また質問というより研究姿勢や発表内容についての助言や間違いの指摘など、研究発表者に返答を求める内容ではない発言が目立ったと指摘する声があった。さらに、こうした研究発表の多さが、逆に言えば、いかに近年、自然災害が多発しているかを物語るものであり、一つの災害を例に、異なる研究者が様々な視点で調査・発表したことから、それらを結びつけることで、その災害像を立体的に浮かび上がらせることが出来たのではないかとの感想もあった。この他、実際に被災地等を訪れての調査報告も多く、被災者の生々しい体験談や目撃証言、そして町内の風評など、多角的で説得力のある発表につながったとする声も聞かれた。

こうして、延べ9時間近くに及んだ初日の研究発表が終わり、続いて、京大生協宇治会館に場所を移しての懇親会が盛大に開催された。会場内では、グラスを手にいくつもの話題の輪が広が

り、この日の研究発表についての追取材や、災害全般についての意見交換、そして調査・取材時のウラ話など多彩な話題に花が咲き、午後8時過ぎにようやく初日の幕が降ろされた。

明けて2日目の土曜日、京都は朝から本降りの雨模様だったが、会場には朝早くから多くの会員が集まり、予定通り午前9時から研究発表が行われた。発表の第一部は、防災対策・計画を主題としたもので座長を富士常葉大学の井野盛夫氏が務め、引き続き危機管理その他についての研究発表が行われ、続いて環境防災総合政策研究機構の宇井忠英氏が座長を務めて、防災教育について7人が壇上に立って発表し、全ての研究発表を終了した。

午後は、1時半から総会が開催され、大妻女子大学の西勝也氏を議長に選出して会員動向や企画・広報・学会誌編集の各委員会の報告等を行い、最後に来年度の第8回学会大会を東京・文京区の東洋大学で開催する旨の事務局報告があり、実行委員長に同大学教授で企画委員長の田中淳氏を選出して閉会した。

引き続きシンポジウムに移り、まず特別講演が行われたが、当初予定していたノンフィクション作家で評論家の柳田邦男氏が急きょ欠席となったことから、富士常葉大学教授で元NHK解説委員の吉村秀實氏に「JR福知山線脱線事故から半年を経て」と題して特別講演をお願いした。吉村氏は、先のハリケーン「カトリーナ」により大きな被害を受けたアメリカ・ニューオリンズの写真を掲げながら戦争が災害を大きくすると説き、さらに今回の電車脱線事故の原因究明について極めて多角的な視点から論点を明確化し、最後に安全性の事前対策がいかに重要かを説いて講演を終了した。さすがに元NHKの解説委員だけあって、持ち時間ピタリでの講演終了だったこともあり、会場内から大きな拍手を受けた。

大会の締め括りは「パネルディスカッション」。日本テレビ報道部デスクの谷原和憲氏をコーディネーターに、特別講演をお願いした吉村秀實氏、兵庫県災害医療センターの中山伸一氏、関西学院大学の森康俊氏、神戸新聞の磯辺康子氏が壇上に並ぶ中、「大事故～メディアと情報の果たす役割は～」と題して約2時間にわたって論戦を展開した。

各パネリストからは、事故直後の生々しい医師の動きが明らかにされた他、災害時に、医師や消防、警察などの関係者にとって、緊急自動参集の際、報道がいかに寄与しているか、またメディアがいかに効率よく初動体制をとって行くかなどについて、それぞれの立場から話が展開され、病院、警察、メディア等が、個人情報保護法との狭間で、いかに効率よく緊急事態に対処していくかなど出席者全員が活発に話し合い、29日土曜日午後5時過ぎに2日間にわたった学会大会を終了した。(日本災害情報学会企画委員会委員・ニッポン放送 村木正顕)



大会会場の京都大学宇治キャンパス『木質ホール』入り口。



実行委員会と学会事務局メンバーによる受付。



開会に先立って、急遽特別講演を欠席した柳田邦男氏の
事情説明をする矢守大会実行副委員長。



開会挨拶をする阿部勝征日本災害情報学会会長。



過去最高の50人の研究発表者と180人を超える参加者との
間で2日間にわたって熱のこもった議論が行われた。



吉村秀實氏の軽妙な語り口ながら厳しい内容の特別講演『JR 福知山線脱線事故から半年を経て』。

急な代役を快諾してくれた吉村氏に感謝。



吉村氏も参加して、大会を締めくくるパネルディスカッション『JR 尼崎脱線事故から半年 メディアと情報の課題』。

コーディネーターは日本テレビの谷原和憲氏、パネリストは兵庫県災害医療センターの中山伸一氏、関西学院大学の森康俊氏、神戸新聞の磯辺康子氏、それに吉村氏。



会場参加者との間で、質疑応答も行われた。



閉会の挨拶をする河田恵昭第7回学会大会実行委員長。